

研究タイトル:

『源氏物語』を中心とした平安時代食文化に関する研究

氏名:	荻田 みどり OGITA Midori	E-mail:	m.ogita@maizuru-ct.ac.jp
職名:	講師	学位:	博士(文学)
所属学会・協会:	中古文学会, 立命館大学日本文学会, 日本文芸学会		
キーワード:	源氏物語, 中古文学, 読解, 食, 食文化, 受容, 京都, 河海抄, 注釈, 夜の寝覚		
技術相談 提供可能技術:	・平安時代を中心とした古典文学作品やその受容作品の読解 ・仮名くずし字の解読		

研究内容: 『源氏物語』を中心とした平安時代文学作品の食事描写の読解

『源氏物語』の食事記述の読解を中心に、平安時代の食文化を明らかにする研究を行っています。

『源氏物語』は単なる絵空事ではなく、当時の文化観念や社会背景に基づいた緻密な心情や情景が描き出されています。その中で、衣生活や住生活については詳しく描かれているのに対し、食生活については比較的淡泊な描かれ方です。しかし、つぶさに見ていくと、限定的だからこそ、その場面、その文脈の中に置かれた意図が見えてきます。

たとえば、『源氏物語』に最後に登場する女君、浮舟^{うきふね}は都から遠く離れた関東で長い間暮らしてきました。この浮舟を、光源氏の子も世代^{かある}の薫^{かいる}が初めて垣間見^{かいまみ}たとき、浮舟に仕えていた女房たちは「栗」のようなものを「ほろほろ」と食べています。貴人である薫は見聞きたことのないものとして、いったん後ずさりしています。栗を熱心に食べる様子を薫の目に映すことにより、都人の価値観とは異なる卑しい感じを如実に描き出しています。

ただし、浮舟自身が食べているわけではありません。浮舟はこのとき、長旅の疲れか、女房たちが起こしても起きようとせず、車の中から出ようとしません。垣間見ている薫のもとに、なかなか姿を現さないのです。つまり、浮舟の周りの人物の食欲を露わにする様子によって田舎びた生活感を出しつつも、今後恋の相手となる浮舟自身はその暮らしに染まりきっておらず、慎み深さがあることをも示しているのです。

御膳での食事や二次会を伴う宴など、平安時代は「食」が現代にも通じる「文化」として醸成された時代です。この時代に人々が「食」をどのように捉えていたか、食に対する意識や価値観を明らかにしていきます。

また、『源氏物語』は現代に至るまで絶えず読まれてきた作品で、注釈書や梗概書(ダイジェスト本)、絵画など、多様な享受の世界があります。時代の中での食事意識の変遷も考察を試みています。

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	

エネルギー

環境

材料

生産・製造

計測・制御

情報・通信

防災・減災

医療・福祉・バイオ

文化・都市計画